

3歳未満児の絵本世界の取り込み過程についての分析

－絵本の読み聞かせをとおしての保育者の気づきから－

大元 千種

【要旨】

本研究では、集団保育において3歳未満児が絵本を通してどのように絵本の言葉や表現を自分のものとしていくのか、37人の保育者による「絵本にまつわる保育のエピソード」の実践からの気づきをもとに分析を行った。3歳未満児は絵本の読み聞かせに受け身ではなく、積極的に参加し保育者や他の子どもたちと絵本を共有することを楽しみ、絵本の世界を自分の中に取り込んでいる。その過程について次のことが明らかとなった。①子どもは慣れ親しんだ絵本の世界を自分のものにしやすい。そのため、②同じ絵本がくり返し読み聞かせされることが重要である。③0・1歳児は、絵本の歌や言葉の心地よさ、音の響きの面白さなどに惹かれて言葉や動作を真似る楽しみ方をし、1・2歳児になると、絵本との対話を楽しむようになる。④0歳児は、絵本の場面からの発語や動作の真似をするが、1歳児は絵本がない場面でも、遊びやそのときに応じて絵本の言葉や動作を表現（再現）するようになる。⑤年齢や発達の違いが子どもたちの絵本の楽しみ方を豊かにする。

1. 目的

集団保育の場では、絵本の読み聞かせは0歳から行われている。寺田・無藤（2000年）¹⁾および寺田（2003年）²⁾によれば、絵本の読み聞かせに対して2歳児は集中時間が短く、絵本を最後まで楽しむより、1ページその場を楽しむことが多い。また、子どもの集中が切れたときに保育者が子どもを見つめたりジェスチャーしたりすることが有効である。

絵本の読み聞かせで保育者が何を大切にしているかについて分析をした大元（2022年a）³⁾によれば、3歳未満児対象では、絵本をもとにして子どもとやりとりを楽しむことが大切にされている。保育者からの一方通行的な読み聞かせではなく、やりとりこそが3歳未満児に絵本の読み聞かせの時間と場を楽しくさせている。また、3歳未満児は体をとおして五感を使って絵本の世界を楽しむことや、くりかえし同じ絵本を読むことの大切さについて多くの保育者が気づきを示していた。初めて読んでもらう絵本は子どもにとっては魅力的であるが、同じ絵本をくりかえし読んでもらうことによって得られる安心感や次のページへの期待と安心感が子ども

に新たな発見や楽しみ方をする余裕をもたらしている。

そこで、本研究では、集団保育において3歳未満児が絵本を通してどのように絵本の言葉や表現を自分のものとしていくのかについて、大元（2022年a）で分析を行った「絵本にまつわる保育のエピソード」（以下エピソード）の保育者による実践からの気づきをもとに分析を行う。なお、本稿は日本保育学会第75回大会のポスター発表論文⁴⁾をもとに加筆修正をしたものである。

2. 方法

本調査は、大元（2022年a）に示したとおり、絵本についての研修会にて受講者に「絵本にまつわる保育のエピソード」の利用に関する説明（利用目的、個人情報取り扱い、エピソードを提供することについての任意性）を文書で行い、同意書とともにエピソードの提供を得た。エピソード提供者は43人であった。そのうち、37人の3歳未満児のエピソードを中心に分析を行う。

調査日（質問紙回収）：2021年11月11日

（事前記入の同意書と回答書を研修日提出）

対象エピソード提供者：保育者 37人

エピソード提供者の所属施設：
 公立保育所 4人
 地域型保育事業所 30人
 不明 3人

3. 結果

(1) エピソードの対象児

1) 対象児の年齢

対象児の年齢の割合を図1に示す。

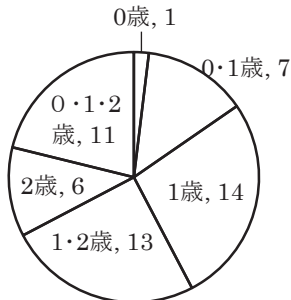


図1 対象児の年齢 (52件)

エピソードには複数の絵本の読み聞かせの紹介もあったため、件数は52となる。また、地域型保育事業所の所属が多かったこともあるが、対象は単年齢のクラスだけでなかったため、34件(78.4%)に1歳児が入っており、30件(64.9%)に2歳児が入っている。

2) 対象人数

対象人数の割合を図2に示す。

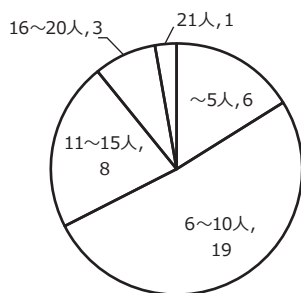


図2 対象人数 (37件)

37エピソードのうち10人以下が25件で、全体の67.6%を占めており、多くが少人数で絵本の読み聞かせが行われている。0歳児のみでは5人、0・1歳児で4人や1人~10人と、2歳児が入っていないエピソードでは人数が少ない。その一方で、2歳児が入ったエピソードでは、17人や19人、21人と大人数である。0歳児がいても2歳児まで含まれると大人数で絵本の読み

聞かせが行われている。

(2) 絵本が読まれる時間帯と期間について

絵本が読まれている時間帯(複数回答あり)については図3に示す。

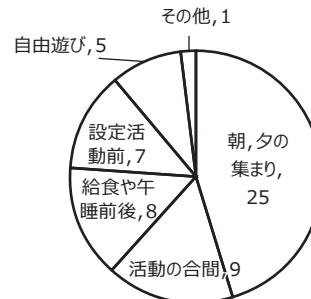


図3 絵本が読まれる時間帯 (55件)

「絵本タイム」という時間を設定しているところもあったが、回答者37人中25人(67.6%)と、多くは朝や夕方の集まりの時間に日課のように絵本が読まれている。さらに、活動と活動の合間や給食や午睡時の前後、設定保育の導入、その他の「みな注目を集めたいとき」など、保育の繋ぎや子どもの気持ちの切り換えの役割を絵本の読み聞かせが果たしているといえる。

また、エピソードにあげられた絵本の読み聞かせの期間は3ヶ月~半年、なかには1年間というところもある。つまり保育では毎日そのときに応じて様々な絵本が読まれているが、長期間同じ絵本がくり返し読まれている。毎日同じ絵本をくり返して読まれる場合もあるが、時々同じ絵本が思い出されたように読まれることもあるであろう。保育室に絵本を常置して自由に子どもたちが手に取れるようにしている保育施設では、子どもが気に入った絵本を自分で開いて読む(見る)こともある。それについても、読み聞かせからお気に入りの絵本になり、子どもが自分で楽しむ姿が見られることがエピソードに記述されていた。絵本がメインの活動ではないにしても、毎日毎日、生活の一部のように何回も子どもたちは「絵本との時間」を過ごしており、絵本を身近な存在と感じているのである。

(3) 絵本の特徴

37人の保育者によるエピソードで取り上げら

れた絵本の総数は45冊で、32種類であった。

読み聞かせの対象となる子どもの年齢によって絵本に特徴が見られる。そのうちの28種類について、読み聞かせの年齢による絵本の特徴を以下に示す。各絵本の作者名や出版社、発行年については本稿「5. 取りあげたエピソードの絵本（記載順）」に示しているのので、ここでは絵本のタイトルのみ示す。なお、エピソードに記述されたすべての絵本については、大元（2022年a）に記載をしている。

0歳児だけを対象としたエピソードは1件のみで、『おひぎでだっこ』が読まれていた。5人を対象としており、0歳児がイメージしやすく発語しやすい絵本の絵やおノマトペが使用された絵本である。読み聞かせのエピソードから保育者と子どもたちがゆったりと絵本を楽しんでいる様子が伝わってくる。

0・1歳児でも、おノマトペがたくさん使われている『ぼん ちん ぼん』や『じゃあじゃあびりびり』が読まれている。また、子どもが年齢的に挨拶を少しずつ覚えてくる時期であることを考えてか、『だるまさんと』や『ごあいさつあそび』が読まれている。

1歳児では動作と言葉を真似やすい絵本の『だるまさんが』『いいおへんじできるかな』『めんめんばあ』などが選ばれている。また、『いろいろばあ』『いれてくやさーい』など、ものの名前や色などの言葉と認識を拡げる絵本があげられている。

1・2歳児では、『おひさまあはは』や『あっぷっぷ』のような笑い声や笑顔、表情を楽しみ、思わず笑顔になりそうな絵本が読まれている。『やさいのおなか』や『やさいさん』は、設定保育や発表会の練習に導入的に入れられている。また、子どもがこわいけれど興味のあるおばけの『どろんばあ おばけかぞえうた』の数え歌や、歌と一緒に合わせて楽しむことができる『どんぐりころころおやまにかえるだいさくせん』のような絵本も読まれている。動物がお礼にお返しを置いていくという、あまり複雑ではないくり返しのある物語の『どうぞのいす』も楽しんでいる。さらにピンクのブタが登場人物の『パンツのはきかた』のように楽しく生活習慣をし

つけていくような絵本も選ばれている。

2歳児では、みんなで押し合いへし合い触れ合って遊びたくなる『おしくらまんじゅう』や、『はらぺこあおむし』や『くれよんのくろくん』のような物語の絵本の他に、2歳の年齢としては少し難しいが『おおきくなるということは』も読まれている。また、歌を歌いながら楽しむ『どんないろがすき』や、吹き絵遊びに繋がる『ふーってして』など、他の保育活動に発展するような絵本があげられている。

年齢幅のある0・1・2歳児を対象とした絵本は、『おべんとうバス』『バスがきました』『だるまさんが』『だるまさんの』『だるまさんと』が読まれている。また、『できるかな？ あたまからつまさきまで』も、子どもの発達によってできる動作は違うが、それぞれに絵本の動物の動きを真似て楽しむことができる絵本である。これらの絵本は0・1・2歳のどの年齢でも楽しんでいるからエピソードに記入されているということを見ると、それぞれの年齢に応じた楽しみ方ができる絵本といえる。

（4）0・1・2歳児の絵本の特徴

絵本はあまり年齢を問わないが、上述の0・1・2歳児対象に選ばれた絵本は、どの年齢の子どもによく読まれる絵本であろうか。絵本の読み聞かせで子どもが楽しんでいる様子をコメントしている絵本ナビ⁵⁾の回答者数の年齢（大人以外）をまとめると、表1～表6のようになる（2023年1月10日現在）。絵本ナビの回答者は、ほぼ父母や祖父母であることから家庭内での読み聞かせが中心であるが、おおよそどの年齢の子どもがよく楽しんでいるかが見えてくる。

1) 『おべんとうバス』

表1 『おべんとうバス』の対象（51件）

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳
件数	7	19	20	5

「バスにのってください」「ハンバーグくん」に「はい」と答えるなどのやりとりが楽しい絵本である。表1のように、3歳未満児が46件で90%以上を占め、そのうち2歳児が20件（39.2%）、1歳児が19件（37.3%）である。コメ

ントからも家庭内でお返事あそびを楽しんでいる様子が見られる。

2) 『バスがきました』

表2 『バスがきました』の対象年齢 (75件)

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳以上
件数	6	36	25	8

バス停にしっぽや耳がついており、どの動物のバス停かがわかる絵本である。表2のように、3歳未満児が67件で約90%を占め、そのうち1歳児が36件(48.0%)と最も多い。ねずみやうさぎなど他の絵本でもなじみのある動物であるためか、0歳児にも読み聞かせがされている。

3) 『だるまさんが』

表3 『だるまさんが』の対象 (440件)

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳以上
件数	118	164	78	80

この絵本は対象年齢を問わず12歳以上の子どもや、数には入れていない大人も19人楽しんでいる絵本である。それでも表3のように、360件で約82%が3歳未満児に楽しんでいる。そのうち一番多いのが1歳児で164件(37.3%)となっており、0歳児も118件(26.8%)である。

4) 『だるまさんの』

表4 『だるまさんの』の対象 (225件)

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳以上
件数	43	91	47	44

この絵本も12歳以上の子どもや大人(15人)も楽しんでいるが、表4のように181件(80%)の対象が3歳未満児である。そのうち1歳児が一番多く91件(43.0%)となっており、0歳児は43件(19.0%)である。

5) 『だるまさんと』

表5 『だるまさんと』の対象 (201件)

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳以上
件数	34	72	52	43

この絵本も12歳以上の子どもや大人(13人)も楽しんでいるが、表5のように3歳未満児が158件で約80%である。そのうち1歳児が一番多

く72件(35.8%)であるが、0歳児が34件(16.9%)、2歳児が52件(25.9%)と、年齢的に少し高めの子どもに読み聞かせされている。「だるまさん」シリーズの中では、0歳児には『だるまさんが』が一番親しみやすく楽しまれている絵本であることがうかがわれる。

6) 『できるかな? あたまからつまさきまで』

表6 『できるかな? あたまからつまさきまで』の対象 (61件)

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳以上
件数	0	14	25	22

回答では、表6のように3歳未満児が39件で約64%を占めており、そのうち2歳児が一番多く、25件(41.0%)である。真似が好きな子どもたちは動物と同じようにやってみることを楽しめる絵本である。集団保育の場では0歳児にも1・2歳児と一緒に読まれているが、家庭内では0歳児には読まれていない。0歳児には絵本のバッファローやアザラシなどのなじみが薄く、動作も模倣するには難しいからであろう。

このように、エピソードで0・1・2歳児に読まれている絵本は、家庭では0歳児にも読まれてはいるが、多くは1歳児や2歳児が楽しんでいる絵本である。

(5) 絵本の読み聞かせからの子どもの様子

1) 0・1歳児

エピソードでは、0歳児も1歳児も絵本の人物と同じ動作の真似をしているが、年齢による違いが見られる。0歳児は『おひざでだっこ』の読み聞かせが始まると、保育者のところにやって来て甘えたり、たぬきの登場でおなかをポンポコしたり、食べ物が出てくると食べさせてくれる真似をしたり、「だっこ」「ねんね」などを発語したりしている。

1歳児は『いいおへんじできるかな』で真剣な表情で聞いたり真似て返事をしたりするだけでなく、朝のお名前呼びや活動中に名前を呼ばれると「あい!」と自分なりに返事をする子どももいることが、絵本に関係したエピソードとして記入がされている。『めんめんばあ』では、保育者と一緒に絵本の言葉をくり返して言った

り、友達と遊んでいる時に布を顔にあてて「めんめんばあ〜」と言っていないないばあをした
り、保育者を真似て「〇〇ちゃんどこかな？」
と言ったりする姿がある。

同じ絵本でも年齢によって楽しみ方が違う。
『ぼん ちん ぱん』では、0歳児は読み聞かせ
に合わせてリズムや音を楽しんで体をゆらした
り声を出したりしているが、1歳児は絵本の「〜
ぱん」の音を出すのを楽しみ、タイミングを待
ってワクワクしている姿がある。目の前の絵本
の場面だけでなく、次の場면을期待し待つと
いうように、見えないもの（場面）を想像して
遊ぶ楽しさがあるのである。まだ発語できな
い時期の子どもでも、保育士が読むのを聞
いて、音やリズムを楽しんでおり、くり返
し読んでもらうことで、真似して声を出すよ
うになり、「ぱん」から「ぼん ちん ぱん」「ち
ぎちぎ〜」などと少しずつ言える言葉が増
えてくるという。一人でページをめくりな
がら読んでいる子どももあり、名前を言
ったり食べる真似をしたり顔を近づけたり
成長とともに楽しみ方も変わっているとい
う。

『ごあいさつあそび』でも、発語できな
い0歳児は絵本の登場人物と一緒に
お辞儀をするが、1歳児は「こんにち
は」を言葉と動作で真似ることが記述さ
れている。保育者も登場人物の真似を
しながら読み聞かせをすると、子ども
も一緒に
お辞儀やハイタッチをしたり、「バイ
バイ」と手を振ったり、ページをめ
くるたびに「バア」と言ったりする
ことも記されていた。子どもの発達
によって真似の仕方も異なり、子
どもが自分でできるご挨拶の模倣
を絵本と一緒にしている。何度
も読んでいるとその絵本を持
ってきただけで子どもが笑顔
になり、読み聞かせが始まる
のを楽しみに待っているとい
う。読み聞かせ場面
でなくても、普段遊んで
いるときにもご挨拶の仕
草を見せている。

しかし、最初から子どもたちは絵本を
もとにして動作やオノマトペなどを真
似て楽しむわけではないようである。
エピソードによれば、は
じめて子どもたちが『じゃあじゃあ
びりびり』を見た時は、興味はあ
るものの動きも発声もな
かったという。ところが、くり返
し読んでいく

うちに、子どもの方から絵本のなか
の音を発するようになり、体を動
かす姿も見られるようになってい
く。さらに、絵本がなくても絵本
に書かれている言葉を聞いている
だけでその音を発したり手を動
かしたりする子どももいるとい
うことがエピソードに書かれてい
る。

2) 1・2歳児

1・2歳児も、『おしくらまんじゅう』
や『おひさまあはは』『あっぷっぷ』
『どろんばあ おばけかぞえうた』
にみられるように、絵本の動作
や笑い声を真似て楽しんでいる。
さらに、『やさいさん』『やさ
いのおなか』『いろいろバス』
では、保育者のクイズのような質
問に答えたり自分たちから野菜
や色を発語したりなど、保育者
とのやりとりを楽しむようになって
いる。

『どんぐりころころだいさくせん』
では、初めての読み聞かせの
ときに驚いた様子で静かに絵本
に引き込まれていたが、何度
も読み聞かせしているうちに
ゲンゴロウやザリガニなどの生
き物の名前を知りたがりたり一
緒に歌ったりするようになって
いる。リスのポーズを面白が
ってそのシーンになると同じ
ポーズをとる子どももいる。
散歩先でのどんぐり拾いでは、
木の周りの若木を「これ何？」
と2歳児に尋ねられた保育者
が絵本の一部を歌うと、「ニョ
キ、ニョキ、ニョキ、ニョ
キ」と言う子どもや、リスの
ポーズをする子どもがいる。
さらに、どんぐりが上から
落ちてくるとカラスを探したり
など、そこに絵本がなくても、
モノや活動を絵本の世界と
関連付けている姿が見られて
いる。

3) 『だるまさん』シリーズ

『だるまさん』シリーズは、年齢幅
を超えてどの年齢でも楽し
まれている絵本である。0・1
歳児の読み聞かせのエピソード
には、初めは見ていただけだ
ったのが、保育者が体を動か
してくり返し読んでいくな
かで、一人の子どもが体を
揺らし始めると、他の子ども
も一緒に揺らして楽しむよう
になったという姿が記述され
ている。絵本の楽しさは、
みんなと一緒に体を揺らす
心地よさや楽しさでさらに
増していくようである。

また、「どてっ」「おしゅー」
などの擬音語の発語や、目
や手などの体の部位を覚
えるきっか

けになっているという保育者の気づきもある。別のエピソードの1歳の子どもたちの様子では、読み聞かせの後、子ども同士で「どて!」「びろーん」など、だるまさんの動きを真似て遊ぶ姿も見られることが記述されている。絵本の読み聞かせ場面から離れて、「だるまさん」の絵本の世界を再現して楽しんでいるのである。

2歳児が入っている読み聞かせでも子どもたちが動作や言葉を真似ている姿が記述されているが、保育者がフレーズを言うと子どもが真似たり動作をしたりする姿や、読み聞かせとは別に遊んでいるときに保育者が「だ・る・ま・さ・ん・の～」と言うと、子どもたちが反応して口々に「め」「て」などを言うことも示されている。2歳児たちはそこに絵本がなくても絵本の世界を自分のものとして楽しんでいる。

4. 考察

以上より、3歳未満児は受け身で読み聞かせを聞くのではなく、積極的に参加し保育者や他の子どもたちと絵本を共有することを楽しみ、絵本の世界を自分の中に取り込んでいることが明らかとなった。また、3歳未満児には、絵本を静かに読み聞かせるよりも、絵本で楽しむ、あるいは遊ぶような読み聞かせによって子どもが絵本の世界を自分に取り込んでいくということもエピソードの分析より明らかとなった。子どもたちと一緒に絵本を楽しむ保育者の存在が重要である。

3歳未満児が絵本の世界を自分の中に取り込んでいく過程について、以下にまとめる。

①3歳未満児は、いろいろな新しい絵本よりも慣れ親しんだ絵本のほうがその世界を自分のものしやすい。3歳未満児クラスでは、絵本は毎日、複数回の読み聞かせがされている。子どもは保育者や他の子どもたちと絵本の楽しさを共有し、共感しあう機会がくり返しある。新しい絵本は魅力的であるので、子どもたちは読み聞かせの最初は動きも発語もなく、真剣に絵本を見ている。ところが、くり返して読み聞かせられることで、自然に絵本の世界と同じような動作や発語が子どもの中から引き出されてくるのである。

②同じ絵本がくり返し読み聞かせられることは、特に3歳未満児が絵本の世界を自分の中に取り込むことにおいて重要な意味がある。

何度も同じ絵本を読み聞かせてもらうことで、子どもも内容や場면을記憶でき、言葉も覚えられる。それによって、子どもは絵本の内容や次のページを予想し期待をする。ページがめくられると期待が裏切られない安心感や満足感を得られて、さらにその絵本が好きになり、絵本の言葉や音、動作、世界観をわがものとしていくのである。期待が裏切られないことは自己効力感にもつながるといえる。エピソードの中にも、子どもたちがわくわくしながら次の場面を待っている姿が書かれていた。

それだけでなく、内容や場面をわかっているため、同じ場面でも違った見方や発見をする余裕がもたらされることにもなる。子どもたちがさらに新しい絵本の楽しみ方をするようになるということである。

③0・1歳児は、絵本の歌や言葉の心地よさ、音の響きの面白さなどに惹かれ、体を揺らし、絵本の言葉や動作を真似る楽しみ方をする。1・2歳児になると、絵本との対話を楽しむようになっていく。さらに、個人的な楽しみ方ではなく友達や保育者と一緒に挨拶や返事、モノの名前のあてっこなどやりとりすることも楽しむようになる。

④0歳児は、その場に絵本があり、読み聞かせてもらっている場面からの発語や動作の真似をする。保育者が読み聞かせをしているので、エピソードには保育者が率先して声に出し、身振り動作をすることも記されている。0歳児は、具体的な手がかりがある場面で真似をするのである。

一方、1歳児では、絵本がない場面でも、遊びやそのときに応じて絵本の言葉や動作を表現できるようになっている。単なる真似ではなく、絵本の世界の「再現」である。そして子ども同士でその表現を楽しみあっている。それは、目の前に見えないものでも、それぞれ自分のイメージで遊ぶことができるごっこ遊びの芽生えともいえる⁶⁾。

⑤今回のエピソードの対象年齢クラスが異年

齢であるものが多かったが、そのことが子どもたちの絵本の楽しみ方を豊かにしていることが明らかとなった。0歳～2歳の異年齢での読み聞かせでは、0歳児と2歳児とでは模倣の仕方や楽しみ方が異なる。しかし、0歳児には発語や動作模倣が難しい場合も、1歳児や2歳児の姿を見ながら一緒に楽しみ、次第に発語や動作模倣をしていくようになる。1歳児や2歳児から刺激を受けて、0歳児は日々成長発達をしていくのである。多くのエピソードでは、保育者も一緒に楽しみながらの読み聞かせをしているが、保育者も子ども同士も笑い合っていることこそが子どもたちの発語や動作を促し、絵本の世界のイメージを豊かにしているといえる。

また、『できるかな？ あたまからつまさきまで』のように0歳児にとっては難しい動作や言葉であっても、集団保育の場では、1、2歳児たちが動物の動作を真似て遊んでいる様子を見て楽しむことができる。絵本の楽しみ方としては、絵本の内容を理解して楽しむだけではなく、場を共有することの楽しさもあるといえる。同年齢集団であっても3歳未満児は特に発達に個人差があり、絵本の楽しみ方も異なっている。しかし、子どもに発達の差や違いがあることが絵本の世界を子どもたちが自分のものとして取り込んでいくうえで、かえってよい役割を果たしていると考えられる。

5. 取りあげたエピソードの絵本（記載順）

- 1 『おひぎでだっこ』（内田麟太郎文・長谷川泰史絵 童心社 2014年）
- 2 『ぼん ちん ぱん』（柿木原政広作 福音館書店 2021年）
- 3 『じゃあじゃあびりびり』（まついのりこ作 偕成社 1983年）
- 4 『だるまさんと』（かがくいひろし作 ブロンズ社 2009年）
- 5 『ごあいさつあそび』（きむらゆういち作 偕成社 1988年）
- 6 『だるまさんが』（かがくいひろし作 ブロンズ社 2008年）
- 7 『いいおへんじできるかな』（きむらゆういち作 偕成社 1992年）
- 8 『めんめんばあ』（はせがわせつこ文・やぎゅうげんいちろう絵 福音館書店 2006年）
- 9 『いろいろばあ』（新井洋行作 えほんの杜 2011年）
- 10 『いれてくやさーい』（きだやすのり作・わたなべあや絵 ひかりのくに 2019年）
- 11 『おひさまあはは』（前川かずお作 こぐま社 1989年）
- 12 『あっぷっぷ』（中川ひろたか文・村上康成絵 ひかりのくに 2003年）
- 13 『やさいのおなか』（きうちかつ作 福音館書店 1997年）
- 14 『やさいさん』（tupera tupera作 学研プラス 2010年）
- 15 『どろんばあ おばけかぞえうた』（小野寺悦子文・植垣歩子絵 福音館書店 2018年）
- 16 『どんぐりころころおやまにかえるだいさくせん』（スギヤマカナヨ作 赤ちゃんとママ社 2014年）
- 17 『どうぞのいす』（香山美子作・柿本幸吉絵 ひさかたチャイルド 1981年）
- 18 『パンツのはきかた』（岸田今日子作・佐野洋子絵 福音館書店 2011年）
- 19 『おしくらまんじゅう』（かがくいひろし作 ブロンズ社 2009年）
- 20 『はらぺこあおむし』（エリック・カール作・もりひさし訳 偕成社 1976年）
- 21 『くれよんのくろくん』（なかやみわ作 童心社 2001年）
- 22 『おおきくなるということは』（中川ひろたか作・村上康成絵 童心社 1999年）
- 23 『どんないろがすき』（坂田修作・100% ORANG絵 フレーベル館 2016年）
- 24 『ふーってして』（松田奈那子作 KADO KAWA 2020年）
- 25 『おべんとうバス』（真珠まりこ作 ひさかたチャイルド 2006年）
- 26 『バスがきました』（三浦太郎作 童心社 2007年）
- 27 『だるまさんの』（かがくいひろし作 ブロンズ社 2008年）
- 28 『できるかな？ あたまからつまさきまで』（エ

リック・カール作・くどうなおこ訳 偕成社
1977年)

6. 引用文献

- 1) 寺田清美・無藤隆「2歳児の絵本の読み聞かせ場面における保育者の思考と行動」『日本保育学会第53回大会発表論文集』2000年, pp.304-305
- 2) 寺田清美「絵本の読み聞かせ場面における子どもの変化」『日本保育学会第56回大会発表論文集』2003年, pp.228-229
- 3) 大元千種「3歳未満児への絵本の読み聞かせについての保育者の意識—絵本にまつわる保育のエピソードからの分析—」『センターレポート』2022年a, 第41号, pp.34-41
- 4) 大元千種「子どもが取り込む絵本の世界について—保育者の気づきからの分析—」『日本保育学会第75回大会論文集』2022年b, pp.1237-1238 (P-607-P-608)
- 5) 絵本ナビ <https://www.ehonnavi.net/> (2023年1月10日アクセス)
- 6) 赤木和重・岡村由紀子・金子明子・馬飼野陽美『どの子にもあ～楽しかった!の毎日を 発達の視点と保育の手立てをむすぶ』ひとなる書房 2017年, p.53, pp.60-61